



第42号  
平成十三年  
(2001)  
1月15日発行  
(年4回発行)

牛耳・明雅  
文音両吟歌仙「傘齡の春」評註

東 明雅

昭和三十六年(一九六一)に根津芦丈先生に弟子入りして、それ迄の仕事であった西鶴の研究を全部放り出し、連句の実作と研究に没頭した私であったが、四十三年には肝腎の芦丈先生を失い、途方に暮れる有様であった。その時、私たちを教え、また作品を見て下さったのが、都心連句会の二長老、清水瓢左・野村牛耳の両先生であった。もともと都心連句会は芦丈先生の指導のもとに、昭和三十五年、即ち信大連句会より一年前に結成された会で、私もからすればいわば兄貴分にあたる会である。それまでも、いろいろな交渉・交流がなかったわけではないが、昭和四十五年の芦丈先生三周忌を機に、連句復興の気分が全国的にもえ上ると、新しい連句を作ろうという志を一つにして、お互いの交流が盛ん

になったのである。

この一巻にそのころの我々の志を読み取って下されば幸いである。

### 傘齡の春

年輪をのみの傘齡春迎う

ベレーの頬を撫ずる柔東風

朧月砂に海亀尾を曳いて

生の神秘を映すT・V

眼つむれば向日葵の画の残像も

ピッコロを吹く夏のファイナーレ

混血児の母なる国へ戻る日に

ダイヤの光り指に眩しく

三方を鏡のベッドしらじらし

2DKもマンションのうち

返り花子ら健かな寺の庭

石焼き芋屋のおいて行く月

リンチには指を詰めるということも

気圧の谷の不意に移動し

ガリレオのまわる地球は今になお

コンピュータの語る未来図

ノッカーに応えのありし海棠花

文豪住めり囀りの奥

穴を出て玉虫色に光る蛇

妖婦の相よ切れし 眦

おさまりは濡場につづく責場にて

曝書の中に「梅曆」など

舌を灼くテキーラ朱夏のものならん

胸毛背毛を風のくすぐる

牛耳  
明雅

耳 雅

マンボーは青海原に枕して

おやじの将棋いつも中飛車

五十年旅路の果の旅役者

荒地変じてコンピナートに

見つけたる真昼の月の淋しけれ

久しく咲かぬ木犀に佇つ

人形師鑿のさばきも秋深く

紅毛人に哭く故郷あり

文明の進歩山河を破壊して

インスタントも慣れっこになる

花吹雪浴びつつボンゴ叩きつつ

水温みたり草魚四尺

(昭和四六・一・二七、昭和四六・八・三〇)

オモテ、明治二十四年生まれの牛耳先生はこの年八十歳。いつもベレーを冠っておられた。色浅黒く、大枠の黒い眼鏡をかけた先生は名の通り耳が異常に大きく、何か仙人を見ろような感じがした。

ウラ 12行のうち、7行にカタカナが入っている。現在となつては気になるが、当時は気にしなかった。

ナオ このあたりの付味の新しさ、激しさ、転じの見事さはとても八十翁の作とは思われない。私もこれを生涯のお手本としたい。

ナウ 一巻の序・破・急・自・他・場、その他、古い式目でも合理性のあるものは出来る限り忠実に守りながら、新しい連句を教えられた先生に心からお礼を申し上げる。

謹賀新年

歳旦三つ物

猫蓑会主宰

東 明雅

新しき世の年酒酌む草の庵

初富士拝む東海の浜

白蛇は弁財天の使ひにて

平成十三年 元旦

(二〇〇一年)

桃径庵 式田 和子

かにかくも御慶申さんあちらへも  
着衣始也 鱗紋様  
春霞大名題継ぐ人あらん

緑華亭 坂本 孝子

カウントダウン零から一へ巳年かな  
果なき夢を初旅の地凶  
復活祭異教の吾も連なりて

梅香庵 副島 久美子

世紀移る刻の瞬き去年今年  
初東雲に羽搏ける鳩  
清貧の言ふは容易く花浴ひて

梓庵 中川 哲

若男小粋な帯の昨日今日  
心ひかれる宝恵駕籠の内  
新世紀とぐるを巻いてのそむらん

涼月庵 中田 あかり

粥腹も茶腹も知りて千代の春  
初湯溢るる星光る頃  
紅筆に花の妖精ひそむらん

冬霞庵 上月 淳子

読初めや表紙手擦れし万葉集  
日当る縁に咲く福寿草  
幼などち石けりじゃんけん麗らかに

袖菊亭 豊田 好敏

子午線の世紀をまたぐ御慶かな  
年男等の汲みし若水  
春スキー交々酒を持ち込みて

卯遊庵 蒲原 志げ子

諸事好転夢を託さん新世紀  
鳥の啄む朱き千両  
老の春忘れましたと口拭いて

出合いは神慮

今から四十年も昔である。職場の新春俳句会があつて、私は講師謝礼を届ける役を仰せつかった。コンピュータ部門のマネージャーになりたての若造であつた。

大竹孤悠先生は手火鉢をしながら私に問答をしかける。

「コンピュータとは何ですか？」

「それはプログラムで動くのです。」

「プログラムとは何ですか？」

「それは数字で書いた回路です。」

果てしなく続く問答に辟易した私は

「先生、コンピュータは巨大な時計なので

す。佛教でいう刹那よりも早く時(クロック)をささむのです。」

「それは素晴らしい。コンピュータは俳句と同じだ!!俳句は刹那を詠み、永劫を歌うのです。」

かくて私は右脳でコンピュータを、左脳で俳諧を楽しむこととなつた。

馬蹄形磁石の人生

棒磁石を折り曲げると馬蹄形磁石となる。

子供の頃に砂鉄をすくつたり、釘をぶら下げて遊んだあれである。この磁石は本来最も離れているN極とS極とが最も近くに位置しており、そのため却って磁力が強められている。

コンピュータ・エンジニアが俳諧を遊ぶというのはまさに馬蹄形磁石の論理であろう。連句でいえば逆付けもいところだ。しかし、コンピュータの疲れが俳諧で癒され、凡庸な句想がコンピュータで刺戟を受けるのである。お互いに活性化する喜びがある。

私は多年の経験から、内むきの仕事が多い情報部門と外むきの営業部門とを近づけ、仕事も人事も交流することによって職場の活性化を図ってきた。世の中には意外なものを取り合わせる事によって、新しい美が生まれることがある。これが疎句の魅力であり、二物衝撃の効果である。ヘレニズム文明も白鳳天平の美もこうして生まれた。

俳諧はファジーだから面白い

コンピュータで連句が付けられますか?などと冗談話も出る。物付、心付は何とか攻められよう。これらにはキーワードがあるからである。だが、余情付は今のところお手あげと言わざるを得ない。

連句は連想の文芸である。ところが今のコンピュータは、フォン・ノイマンという天才数学者の考えた逐次論理で動いており、連想思考が全くの苦手である。想像、直感、ひらめき、というのがない。

コンピュータがチェスの名人と勝負して勝った、などというのは、無数の攻め筋を一つ一つ試みて「治定」するのだが、連句の付け

にそんな筋がある筈もない。

コンピュータ屋から見ると、連句の付けというのは極めて「あいまい」である。これを情報論ではファジーという。理詰めで几帳面にやったから诗情ゆたかになるというものでもない。むしろ、ファジーの方がよいとコンピュータも思い始めている。

例えばインターネットでは、通信はだいたい届けばよい、というファジー論理で仕組み、機器やソフトを簡素にした。それを通信ルートを多くすることで補ったのである。だから十年前の湾岸戦争ではインターネットだけがイラクの戦況を伝えた。他の通信はみな杜絶したのである。ファジーだから強い、というのはコンピュータもなかなか俳諧味がありますね。

連想を得意とするコンピュータが日本の若い技術者によって開発されつつある。第五世代コンピュータと称するが、流石に連句王国日本ならではの技術と思う。

連句が現代に甦って三十年、まだ若い、可能性に満ちた文芸である。この「ふしぎな文芸」が式目を楽しむ「形の美」でゆくのか、「诗情の美」を深めるのか、二十一世紀の発展が楽しみである。詩の神は古来、カオスやファジーが好きという。新世紀のニューモード、「ファジー連句」などはいかがですか。

(俳文芸誌「筑波」主宰)

第二十一回俳諧芭蕉忌正式俳諧

正式俳諧 脇起り二十韻

二十韻「桃青忌」 東 明雅 捌

次第

役割

一	席改め	宗匠	上月	淳子
二	席入り	脇宗匠	原田	千町
三	配硯	脇宗匠	梅田	利子
四	献花	執筆	青木	秀樹
五	執筆呼び出し	知司	島村	曉巳
六	文台捌き	副知司	近藤	守男
七	俳諧興行	座配	椿	紀子
八	花前	座見	秋山	志世子
九	献香	花司	田村	満子
十	花の句披露	香元	山口	美恵
十一	端作り	硯配	橋野	代々子
十二	吟声	同	中野	昌子
十三	文台返し	同	日高	玲
十四	作品奉納			
十五	納硯			
十六	挨拶			
十七	退席			

平成十二年十月十八日  
於 江東区芭蕉記念館

「葱白く」

葱白く洗ひ立てたる寒さかな  
 鷓鴣かさと遊ぶ風除  
 面打ちは木屑を膝に溜めをりて  
 幾何学模様のパンダナを締め  
 月出でてねぶた跳ね人どらっせーら  
 修道女にも香る新藁  
 爽やかにプロポーズする王子さま  
 トランプ占ひばが邪魔する  
 地震しきり噴火予兆か浅間山  
 ON対決沸くぞ球場  
 国境の警備兵飼ふかたつむり  
 ヨットのデッキ仰ぐ夕月  
 この背中どこかで見たよどこだっけ  
 いとしき野獣やつと静める  
 名にしおふおかめひよつとこもの狂ひ昌子  
 ジャズのライブが響く地下室  
 勲三等髭の恩師の祝ひ酒  
 鮎の子放つ故郷の川  
 茅葺きの古刹の軒に花を浴び  
 春日遅々と宿決めぬ旅

翁 明雅 美恵 紀子 千町 郁子 曉巳 利子 守男 満子 代々子 志世子 常義 英子 泉子 千恵子 玲 淳子 執筆

白波を立つる大川桃青忌

ばら撒かれたる都鳥百

リユック背に古書店めぐりきりもなし

ゲームソフトで留守番の児ら

月祭るだんこの頂上狙ひめて

この草屋も十年目の秋

次々に芋のごとくに子を作り

ドタキャンばかり披露宴席

夢判断善くも悪くも取りやうで

哀れ哀れと処方箋書く

泡盛を一气呑みした仏達

夜焚舟出る月を待つ間に

糸杉を描きにはるばるトスカーナ

恋泥棒も耻のかき捨て

逃げましょう追手のせまる女道

お助け下さい大魔神様

飛車の裏びしり返して駄目押しに

養蜂箱の並ぶ故里

日本中呼んでをるなりおらが花

糸かきならず春のじよんがら

平成十二年十月十八日首尾  
於 江東区芭蕉記念館

明雅 了斎 順子 利子 志げ子 斎 順 利 志 斎 順 利 志 斎 順 利 志 斎 順 利 志 斎 順 利 志

連衆 鈴木了斎 和田順子 梅田利子  
蒲原志げ子

二十韻「深川に」 青木 泉子 捌

深川に新駅ひとつ翁の忌 泉子  
 木葉くるりと風に舞ふ角 千町  
 リフォームのカラータイルを磨きぬて 碧  
 インターネットで子供服買ふ 千寿子  
 笛の音の間こえ玉兔の走るよな 淑代  
 ひそやかに逢ふ重陽の宴 町  
 ふるへゐる君を抱きて露の寒 碧  
 海岸通り捨てたフェラーリ 代  
 鍵ならばどんな鍵でも開けますよ 碧  
 心入れ替へ介護福祉士 寿  
 熱帯魚倦怠の泡ほつと吐く 町  
 科挙に合格夏瘦せの月 碧  
 引越の手伝ひにとて超ミニで 寿  
 牛井好きが横恋慕する 代  
 化けて出る赤いしごきの解けかかり 町  
 藁葺きの屋根ぬらす糠雨 代  
 養生訓守ってつひに傘寿越え 町  
 廻し飲みする香春の酒 泉  
 宇宙基地やがては花の開くらん 町  
 おたまじゃくしが解る山里 寿

平成十二年十月十八日首尾  
 於 江東区芭蕉記念館  
 連衆 原田千町 松本碧 紺野千寿子  
 浅賀淑代

二十韻「晚菊の」 伊勢本 如代 捌

晚菊の光やさしき翁の忌 如代  
 裔の弟子ども集ふ小春日 路子  
 億年のX波へと耳をたて ゆみ  
 鶴亀算でノートびっしり 水壺  
 新築のビルが母校ぞ望の月 麻子  
 蓑虫そつと呉れた初恋 敬子  
 秋遍路やもめ同志がひとつ宿 麻  
 金の成る木を購ひて候 如  
 よなを被て無人となりぬ三宅島 路  
 エルサレムには道理引つ込む 壺  
 お母さん白髪を抜けば禿げちゃうよ 壺  
 月に涼めば自棄の大酒 路  
 するすると簾のおりる奥の部屋 路  
 番頭やめてひもにおさまる 壺  
 iモードより声高なラブコール 壺  
 惚れる惚けるは同じ字を書く 壺  
 けん玉が得意な家のお婆ちゃん 敬  
 公魚釣りに猫をつれてく 敬  
 ここよりは紙漉の里花しだけ 如  
 茶摘唄にもアルトソプラノ 如  
 壺 路 麻 敬 如 壺 路 壺

平成十二年十月十八日首尾  
 於 江東区芭蕉記念館  
 連衆 倉本路子 青島ゆみを  
 今宮水壺 内田麻子 須賀敬子

二十韻「時雨ふる」 加藤 道子 捌

時雨ふる橋や古人と今人と 道子  
 いよよ耀ふうたびとの冬 健悟  
 招待はファッションショーの案内にて代々子  
 けふの眼鏡はどれにしようか やすこ  
 篝火に高き笛の音月昇る 弘子  
 長脛彦の脛に乗る蟲 悟  
 やや寒に抱き起こされて現なり 弘  
 国のどこかでいつも揺れてる 道  
 綱領を変へて共産党の躁 道  
 早口言葉練習の子等 弘  
 伸身の宙返り見せダイビング 悟  
 はためいてゐる白南風の月 代  
 観音像一本彫りに念をこめ 代  
 演歌のやうな恋をしてゐる 悟  
 あたしにはあなただけよといつもいひ 悟  
 双手挙げても過ぎるタクシー 代  
 荒鷲の死に損ひと自嘲して 弘  
 蕎麦粉まみれのおぼろおぼろに 弘  
 この町の花の名所の富士見坂 弘  
 酒屋の窓に眠る猫の子 弘  
 弘 や 悟 同 代 弘 悟 代 悟 代 や 悟 道 弘 悟

平成十二年十月十八日首尾  
 於 江東区芭蕉記念館  
 連衆 佛淵健悟 橋野代々子  
 池田やすこ 市野沢弘子

二十韻「大川へ」

権頭 和弥 捌

二十韻「時雨忌や」

鈴木 千恵子 捌

二十韻「風は江戸前」

鈴木 美奈子 捌

大川へ裏木戸開くる翁の忌

紋付鳥の遊ぶ倉河岸

目を凝らしシャッターチャンス逃さずに

ぬるき紅茶を啜るスツール

倫敦塔蠟細工めく織き月

長身の男霧に紛るる

スカートの新藁はらひ髪撫でる

子育て地藏辻にひっそり

生き生きとTV出演朱首相

直球一徹取った十勝

横に這ひ何を好んで蟹の泡

夜濯ぎの桶月のためたふ

空徳利厨あるじは知らんぶり

賞味期限の切れさうな齡

旧華族だけが武器です玉の肌

しふちんスター鈍行で来る

盛り上げる老人会の山歩き

蛙見つけて挙げる嬌声

流鏝馬の放つ陰陽花の舞ひ

親王雛に似たる少年

和弥

達子

あかり

暁巳

美恵

一恵

同

り

弥

巳

り

巳

一

美

り

子

一

巳

子

美

時雨忌やものみなどこか寂みたる

遠い眼をする冬の鴉ら

こんにやくはびりりと辛く煮上ぐらん和子

秘蔵大皿乾拭きをする

名月がライトアップの兼六園

秋の袷に厚底の靴

青蜜柑めくかたくながいとほしく

水戸の三ほい知ってゐるかい

落書を芸術と云ふ若き人

オカリナ吹けば風が伴奏

夜を徹し聖ヨハネ祭飲みあかす

月に照らされ蟬は殻脱ぐ

この指にとまれいっしょに逃げませう

老人ホーム男もてもて

読み返す昔の文は色褪せて

砂漠の砂の流れゆく先

恐竜の背骨に幼のせてみる

ジョギングをする啓蟄の頃

花守の車椅子揺る大あくび

行く春惜しみ友と語らふ

千恵子

紀子

和子

常義

珠枝

和

紀

義

枝

和

紀

義

和

同

枝

紀

義

千

紀

枝

深川や風は江戸前翁の忌

旗に染め抜く鼈の鍋

プロローグ伏線数多句はせて

燕尾服来てちよつと変身

夕月の眉ほのぼのと雲に入り

夫婦気取りで紅葉訪ぬる

愛八のくんちの恋は実らずに

オルゴール鳴る夢の中まで

幼き日遊びし庭は地雷原

飛べない鳥を鞆屋が縫ふ

更衣せぬが習ひと酒の友

オープンカーで連れ帰る月

雨降ればひねもす愛のスラッガー

嘘でふくらむ男の懐

銀行と生保を悪魔の贅として

ロボット犬は今も売れ筋

別注の杖を忘るゝ棧敷席

どこまでも噛む栄螺常節

雲水の花の峠を越えゆくか

園児の踊る囀りの中

美奈子

孝子

玲

志世子

哲

世

孝

同

玲

孝

玲

世

奈

哲

孝

世

哲

玲

孝

世

平成十二年十月十八日首尾

於 江東区芭蕉記念館

連衆 篠原達子 中田あかり 島村暁巳

山口美恵 山崎一恵

\*怒りつばい、骨つばい、筋つばい

平成十二年十月十八日首尾

於 江東区芭蕉記念館

連衆 椿紀子 式田和子 生田日常義

花巻珠枝

平成十二年十月十八日首尾

於 江東区芭蕉記念館

連衆 坂本孝子 日高玲 秋山志世子

中川哲

二十韻「そぞろ神」 染谷佳子 捌  
 二十韻「きりきりと」 高橋豊美 捌  
 二十韻「陸奥初時雨」 登坂かりん 捌

鶴来るや俄に憑きしそぞろ神 佳子  
 沼のほとりに木の葉舞ふ頃 郁子  
 キルト展記帳の列の続くらん 久美子  
 焼きたてパンが皆に配られ 秀樹  
 減量にたゆまず励む望の月 昌子  
 新車で誘ふ爽やかな彼 郁  
 初キッスママに内緒のぐみの味 樹  
 爆発的に売れしケータイ 昌  
 非拘束式野党不在で成立か 久  
 悩み少なき島の駐在 樹  
 見渡せば沖に烏賊火の連なりて 郁  
 月を賞でつつ交す焼酎 同  
 褒められて高橋尚子頂点に 久  
 サドとマゾとを使ひ分けたる 同  
 声をきくだけで耳朶熱くなり 之  
 読まない本が溜る一方 昌  
 古稀を過ぎ八十八ヶ所巡る旅 郁  
 嬰の片こと雛壇の前 昌  
 花盛り根津や谷中の猫集ふ 樹  
 雨の上がりて霞むビル群 久

初時雨きりきりと巻くオルゴール 豊美  
 まらうど集ふけふの爐開 清子  
 地下鉄の路線次々伸び行きて 好敏  
 話題の映画かかさずに観る 英子  
 フアックスが来てないからとメールあけ 澄子  
 厨の隅でつぶれさせ鳴く 清  
 西鶴の女皆よし月の影 同  
 美男葛に手足とらるる 澄  
 車椅子シュートを決めて金メダル 同  
 日独米で騒ぐリコール 英  
 父読みし子「我が闘争」は乱丁で 同  
 おばんざいの具千切りにする 清  
 夏行終へ身にしみわたる般若湯 英  
 墓のかまへる山門の月 澄  
 農大のミス・キャンパスとランデヴー 敏  
 おんぶにだっこそして口付け 同  
 この里のただ一軒の悉皆屋 清  
 鷹鳩と化す企業合併 敏  
 借景の花大樹なり新世紀 豊  
 肩にかけてたる春のバシユミナ 執筆

陸奥の旅のみちづれ初時雨 かりん  
 頭巾被りし人の俤 嬬  
 キッチンに手作りの菓子匂ふらん 淳子  
 床にべったりゲーム三昧 朱鷺子  
 観覧車思ひおもひに月めでて 守男  
 宝物だと渡すかまきり 淳  
 雛僧の白脛につく牛膝 嬬  
 妻妾同居天下泰平 朱  
 純金は合金よりも傷み易 嬬  
 現地で習ふタイ・ボクシング 朱  
 砂浜に石花菜を干す好々爺 淳  
 冷酒の盃に月を浮かべて 同  
 愛八と古賀先生の歌集め 嬬  
 あったかあいと懐に入る 朱  
 別れても後ろ姿の男ぶり 嬬  
 山へと続くうねうねの階 淳  
 大決心ドナーカードに登録し 男  
 弥撒の帰りの空に引鶴 嬬  
 平和賞涙で受くる花吹雪 朱  
 憲法記念日ビル日の丸 男

平成十二年十月十八日首尾  
 於 江東区芭蕉記念館  
 連衆 東都子 副島久美子 青木秀樹  
 中野昌子

平成十二年十月十八日首尾  
 於 江東区芭蕉記念館  
 連衆 下鉢清子 豊田好敏 佐古英子  
 八角澄子

平成十二年十月十八日首尾  
 於 江東区芭蕉記念館  
 連衆 八代嬬 上月淳子 橘朱鷺子  
 近藤守男

藤祭

二十韻「亀鳴く頃」 権頭和弥 捌

遠会 積亀鳴く頃の太鼓橋  
 藤の小房の咲きかかる棚  
 弥生 尽ホームページも開かれて  
 十行 書評B4で書く  
 芝居 跳ね涼しき月に足を止め  
 聖ヨハネ 祭後の酔ひどれ  
 懐胎の子は頑なにかぶり振り  
 珍獣 なみのうぶな恋人  
 諳じる 教育勅語御名御璽  
 小学校の 廊下踏み抜き  
 風垣に 雪さへ置かず群れ鳥  
 おしら様 など綴る檻樓裂  
 UFOを 撮影せむと待機する  
 ハリウツド にも流行る笹竹  
 暈の月 くるりと女軽業師  
 独りは 嫌よ霧の舟歌  
 賑やかに 酌むや故郷の新走り  
 選挙 工作準備整ふ  
 西行の 奥津城に花散り敷ける  
 傾げて 開く春のバラソル

平成十二年四月二十五日首尾

於 亀戸天神社

連衆 原田千町 坂本孝子 島村暁巳 村田富美

藤祭

二十韻「曲水の盃」 木村真呂 捌

曲水の 盃のめぐりてゆるやかに  
 十二単の すぐと生ふ苑  
 春スキー 手入れ済まして窓の際  
 籠の インコの餌を継ぎたす  
 明治座の 弁当麦酒月やよし  
 扇を 使ふ見た顔のひと  
 囁きを しかと捉へたレコーダー  
 深い 追跡それはタブーよ  
 成行きで なったと装ふ新総理  
 母の 役目はどたら縫ひ替へ  
 狐火の ところりところりと無縁墓地  
 道路 拡張ほんのそこまで  
 外国人 婚姻届四苦八苦  
 相撲 取りにも惚れてしまった  
 月明り うなじに探すキスの痕  
 鬼の 捨て子の父は何処に  
 世界 地図温暖化して消ゆる島  
 ムー大陸を 徒歩で涉りぬ  
 花の 下彩管振ふ老画伯  
 淡き 虹たつ暮れかぬる空

平成十二年四月二十五日首尾

於 亀戸天神社

連衆 式田和子 山口美恵 近藤守男

\* 編集の不手際で藤祭の二作品の掲載が遅れましたことお詫び致します。

今春発刊

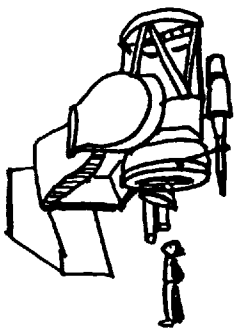
『連句・俳句季語辞典 十七季』

編著者 東明雅・丹下博之・佛淵健悟

三省堂出版 価格 二二〇〇円十消費税

◇ 季別・分野別と五十音順の季語配列に分かれ、初春・仲春等の位置づけや、時候、天象、動・植物、行事、生活等の分類が即座に読みとれる構成で、連句実作者には大変便利である。俳句人にとっても十全な解説を備えている。

連句概説は、連句実作上遭遇するほとんどの問題に対応できるガイドブックになっている。付合例句集は、芭蕉から現代までの付合三句の渡りが、発句、脇、花、月、恋等のテーマ別に収録され、読み物としても面白い。これら全てが一冊となり、携帯にも便利。





連句の裾野を広げる——連句を好きにさせるプログラムを

青木 秀樹

会社に連句部をつくったから一緒にやろうと誘われた時、先輩は「連想ゲームみたいだから」と言った。それ以来、私にとって連句とは「詩的連想ゲーム」であり、「知的格闘技」である。超一流の指導者に教えを受けながら、ひとつの前句にどうしてこんな付け句ができるのか、連衆の発想の多様さにもいつも驚く。自分のひらめきの発掘、連衆間の競争、捌きへの挑戦と、非常に刺激的な時間を持ち、一巻を満尾した後はラグビーのノーサイドと同じような戦友としての共通感覚をもつことを楽しんできた。

日本は宇宙から上の句が発信されると、小学生から老人まで数万の下の句が集まる国であり、人々の脳に五七五、七七の感覚が遺伝子となってすり込まれている。連句を楽しむ潜在能力を大部分の国民が持っていることになる。それにもかかわらず、連句をはじめの人が限られており、特に若い層が少ないのが現状である。

今の若い人（ここでは30代以下ということにして）にとって携帯電話、というよりケータイは生活必需品である。いつでも、どこでもケータイを手放さない。しかも、iモードケータイはeメールもできる。四六時中メー

ルチェックをしている。パーソナルなコミュニケーションが強くなる反面、集団生活が苦手になる。

若い人の次の特徴は上下の関係を嫌うことにある。大学でも体育界系の上下関係よりもサークル系のヨコの関係を好む。会社でも上下関係は最小限にし、ヨコの関係を大切にす。パソコン通信の匿名性を好むのも、ヨコ・コミュニケーション感覚である。また、古臭い、オヤジくさい、ババくさいという言葉は、自分とは無縁という場合に使われている。このような世代に「現在のまま」の連句に興味をもたせることはかなりむずかしいことだ。「古臭いイメージ」が注目を阻害する、試してみたいと思っても「時間・空間的制約」がある、「むずかしいというイメージ」が二の足を踏ませる。多数の人間を連句に取り込むことよりも、連句に興味をもつ限られた人を大事に育てることが重要であろう。

古臭いイメージは、若い世代からスターが生れることで払拭できるものであるが、連句の特性と連句界の現状ではほとんど期待できないだろう。そこでまず古典鑑賞主義を見直すべきではないかというのが私の提案。現代の連句は私達の生きていく現代を映すものであるべきであるのに、作品例として示されるものは古典である。いかに優れた作品であっても古典は古典である。社会構造や生活環境が現代と全く異なる時代の人情を理解するこ

とは現代人には限界がある。かび臭いイメージを取り払うために、現代連句の批評と鑑賞を活発化することが必要ではないだろうか。

時間・空間的制約はパソコン連句、チャット連句が解決してくれる。しかし、捌き手の能力やネット運営の努力が必要であり、まだ発展途上である。その中から本格連句に進むものがでてくるのが期待される。

しばしば連句は式目がむずかしいと言われる。しかし、連句の基本ルールは「歌仙は三十六歩也。一步も後に帰る心なし」（三冊子）だけであり、長句と短句を交互につけて前句と付け句でひとつの世界を創りながら常に前に前にと進む、これだけである。サッカ―とさほど変わらない単純さである。連句の式目は一巻全体の変化を促し、より優れた文芸作品とするためのノウハウやガイドラインのようなもの、ある程度連句に親しんでから習えさほどむずかしくはない。はじめに、ああ、こうしてはいけない、と言って嫌気を起こさせているのではないだろうか。やさしく教えているつもりが、結果として排除することになる。連句は付けと転じが基本、その発想の自由さと楽しさを充分経験することから始めるべきだろう。入門者の進歩の段階以上に教え過ぎないことが重要である。

いまは、連句に興味を持った人を「連句が好き」にさせる、そのような指導者、レッスンプログラムが必要ではないだろうか。

英語連句の試み 花鳥風月(十六)

浅賀淑代

浅みどり花もひとつにかすみつ  
おぼろに見ゆる春の夜の月

菅原孝標女

(『新古今集』卷一春上)

The blossoms too are  
pale green, one with the mist  
in its rising —  
and this spring night the moon  
shows itself as in a dream

(Janine Beichman 訳『折々のうた』より)

新世紀明けましておめでとうございます。  
冒頭にかかげた一首は、花も春月も詠み込ま  
れたおめでたいものですが、二十韻「ねこの  
子」もいよいよ花の句まで参りました。今回  
は、東明雅先生から頂戴しております。

1 夜話は第二世界大戦史 かりん

winter night —  
a history of the Second World War  
handed down

2 南北サミットマジックの壺 慎二

North-South Summit  
a whiff from a magic pot

3 夢殿で逢ひしは花の幻か

明雅

was the blossom  
I saw around Hall of Visions  
an illusion? (拙訳)

夢殿とは法隆寺の御堂のことでしょうか。

英語では Hall of Visions と紹介されていま  
す。二十世紀から新しい世紀へと継がる花  
は幻かとも紛うほどに美しいものでこそあれ、  
現の花であれかしと切に願います。明雅先生、  
素敵な花の句を有難うございました。

英語連句の中で、一番難しいのは花の座と

言えるかもしれません。花が blossom(s) と  
訳され、また、それがレンクスの「花」として  
詠まれる代表的な詞であることは周知のとおり  
です。「花」といえば桜。しかし、花は桜  
に非ず、桜に非ざるにも非ず。この一見矛盾  
した概念を私たち日本人はなんとか咀嚼し、  
飲み込んできました。が、英語で「花」を詠  
むとき、blossom(s) だけで「花」へのあこが  
れや賞翫の心を心ゆくまで表現できるものな  
のだろうか……。私の頭の中にますます強  
くなってきている疑問の一つです。

英詩や小説の中にも花はいっぱいいます。ラ  
ッパズイセン、デイジー、スマイレ、サンザシ、  
ローズマリー、ユリ、そしてバラ。野の草花、  
庭園を飾る豪華な花……。単なる小道具や飾  
りとしてではなく、作家がその心を花に託す

伝統は、花鳥風月を友としてきた日本人の美  
意識とかけ離れたものではないでしょう。

The lily has an air,  
And the snowdrop a grace,  
And the sweetpea a way,  
And the heartsease a face, —  
Yet there's nothing like the rose  
When she blows.

(Christina Rossetti 作)

ユリの花には品があり、  
ユキノハナにはしとやかさがあり、  
スイートピーには趣があり、  
そして野生のパンジーには顔がある—  
けれども花開くときの  
バラに勝るものはない。(杉本誠訳)

このような詩を鑑賞するにつけ、もしかし  
たら、名をもつ個々の花さえも、そこに共感  
する人々にとつての「花」、花の座を飾るこ  
との許される「花」となり得るのではないだ  
ろうか、という思いが湧いてきます。

また、一方で、私たちに「正花」とされる  
詩語(例えば、花火、花言葉、花嫁、花鯉、  
花道、花やか等)があるように、花の座にす  
わる詞がいくつか認められてもよいのではな  
いだろうか。bloom (花盛り)、bouquet (花  
束)、bride (花嫁)、Flora (花の女神)、  
flower (草の花)、petal (花弁)等……。  
年頭に、ハイカイの花について思いを巡ら  
せました。今回は、挙句です。

◇猫箒会案内◇

○奉納正式俳諧

日時 四月二十五日(水) 十二時より

正式俳諧のあと二十韻興行

場所 亀戸天神社

江東区亀戸三六〇

○亀戸天神社 藤浪俳句会

日時 四月二十九日(日) 受付十一時

場所 亀戸天神社 参集殿

兼題 「蝶」「橋」各一句、二句一組に会

費一千元(郵便小為替)を添えて

ご投句下さい。何組でも可。

用紙 規定の投句用紙、又は二〇〇字原

稿用紙(B5判)。

×切 三月十日(土) 必着

席題 当日出題 午後一時締切

会費 一千元

投句先 〒一三六〇〇七一江東区亀戸三

六一 亀戸天神社「藤浪俳句会」係

選者 小澤 實

東 明雅

式田 和子

川野 嘉彦

主催 亀戸天神社

レーシングスポーツ感覚

鈴木了齋

およそ文化的な趣味とは縁遠く過ごしてきて、芭蕉翁が亡くなつたと同じ歳になつて連句や俳句に手を染めた。何度かの素人連句の座と、パソコン通信上の連句や句会を一年ほど経験した後で、昨秋から猫箒会関連の連句の座に出させていただくようになった。

それまでのわずかな経験と較べて何より驚いたのは、一巻の進行の速さ、付句の速さである。それまでの経験の二倍、三倍のスピードだ。カルチャーショックである。

治定句が読み上げられたとたんに短冊を取って句を書き始める人がいる。「考えて」いるならそんなはずはない。使っているのは知力というより、ほとんど反射神経、運動神経のようなものではないだろうか。それまで何度か指導していただいた水壺先生が「考えずに、とにかく早く付けなさい」と繰り返しおっしゃっていたのはこのことか。

そこで気付いたのが、それ以前の「非文化的」な趣味との案外な近縁性である。

三十代から四十代の半ばまで、ほとんどの暇と金を、アマチュアのオートバイレースに出るために注ぎ込んでいた。

その当時でも、人が走っているのをサーキットのフェンス越しに見ていると怖かったが、

自分で走る分には怖くない。時速二百キロ近くでもバイクどうしの相対的な速度差はわずかしかないからだ。

とはいえ、すれすれの攻防戦をやるには、相手の腕前についての見切り、見切った相手の腕前に対する信頼が不可欠だ。勝ち負けを競つてはいても、互いの信頼とルールの共有なしには勝負が成り立たない。何度か痛い思いを重ねるうちに、そういう感覚を体が覚えてくる。出場前にはさんざん作戦を考えるが、一旦走り出してしまつたら頭で考えて判断していたのでは間に合わない。体が勝手に相手と対話して競り合うという感じである。

共有するのはルールだけではない。それぞれ、自分の走り方について独自の美意識を持ち、磨こうとしているが、それは「集合的美意識」のようなものの共有に踏まえている。それに照らして、勝ち負けと別に、誰もが認める見事なレースと糞レースという、レース全体としての善し悪しの判断もある。

人に勝つためにレースをするのだが、自分一人ではレースも「見事なレース」もできない。だからレース仲間には強い連帯意識がある。勝ち負けという要素を除いてしまえば、連衆共同で一巻の連句を巻く、ということと案外似ているのではないだろうか。

そう気づいて「文化的」であることへの余計な思い込みがはずれたようだ。それから私も時には早く付句を出せるようになった。

【Q】 連句の座で、あなたの句は俳句だと言われることがあります、これはどういう意味でしょうか。

【A】 俳句（発句）には一句一章のもの、二句一章のものがあります（三句一章体というものもありますが、極めて稀であるため、ここでは取り上げないことにします）。

一句一章 例 道のへの木槿は馬にくはれけり

二句一章 例 草臥れて宿借る比や藤の花

芭蕉は、一句一章体については、頭からすらすらと言い下すのが上等の発句であると言、二句一章体については、物をよく取り合わせるのを上手と言、悪く取り合わせるのを下手と言、どちらのやり方も否定しませんでしたが、後者に対しては、物を取り合わせて作る時は、句も多く出来るし、速やかに詠むことが出来ると推奨しております（『去来抄』）。

ところで、この俳句十七字の中で物を取り合わせるといふ作業は、連句三十六句の中で、前句に付句を付け合わせるといふ作業に、甚だよく似ております。連句の前句は、それだけでは独立性がないので、これまた独立性の乏しい付句を待って、二つを付け合わせる事によって、芸術性の高い付合になるうとして

いるのであり、ここに連句が次々と続いてゆく力がひそんでいるのであります。

それ故、たとえば花前の句に対して、二句一章の花の句を付けると言うことになれば、その花の句は全く花の俳句を付けるという事になります。その事自体は特に咎められる事でもないかも知れないが、往々素晴らしい花の句を付けようということに精神を集中して、前句との付味をまったく無視した花の句を付ける可能性が生まれます。このような花の句をこれは俳句と申すのです。

これは花の句ばかりでなく、月の句の外、季語をもった長句にもおこりうる事ですから注意して下さい。

ただ、第三だけは、丈高くという事が絶対条件となっており、わざわざ、大山体・小山体・杉形の作り方が伝わっておりませんが、これらははっきりした切字を用いないで、二句一章体とする方法を考えたものです。

大山 正反合天地のリズムきはやかに

小山 落第子口笛を吹く樹によりて

杉形 新走り強き香の鼻うちて

みな、体言の独立句を上五にすえる事によって、二句一章体を完成し、ことに落第子、新走りなどの句は季語を入れることにより、俳句となっており、第三に限って脇との付味は問題にされないから、あなたの第三は俳句だとは言われないうでしよう。

◇ 猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

一万円 原田千町 未来句連句会 桃雅会

木村恒雄（亀戸天神社）

若尾よしえ

二口 狩野康子 華尤子

二万円 山崎一恵

五千元 鈴木慎二 （敬称略）

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫蓑基金

.....S.....S.....

あとがき

○ 俳句雑誌で、俊英俳人の新春座談会というのを読んだ。磨かれた黒耀石の斧のような言葉が句を腑分けしていくさまは小気味よい。一句立ちの宇宙（俳句）は超新星への道をおゆみ始めているようなめまいを覚える。

○ アナログ（アナクロ？）、デジタル、色々で、成人式は大騒ぎ。俳諧のタネも尽きない。皆様のご健吟をお祈りします。

季刊 「ねこみの通信」 第四十二号  
発行者 猫蓑連句会  
編集人 町田市金井6-7-6 佛淵健悟  
〒一九五-0072  
印刷所 アトリエ・Neko